

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320021

研究課題名（和文） 「ヨーロッパ・アジア」の美学的理念史

研究課題名（英文） Aesthetic History of Ideas of “Europe/Asia”

研究代表者

小田部 胤久（OTABE TANEHISA）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：80211142

研究成果の概要（和文）：「ヨーロッパ」および「アジア」という概念が成立し定着していく過程、またこれらの概念に付されたさまざまな正負のコンnotationの変化を、ヨーロッパおよびアジアの諸地域および諸時代の美学的言説・芸術作品・芸術活動に即して明らかにしつつ、現代におけるヨーロッパ・アジアの関係を再考するとともに、間文化的（intercultural）な視点から美学を構築する可能性を探った。

研究成果の概要（英文）： By examining aesthetic discourses, art works and art activities of various areas and times in Europe and Asia, we traced the process in which the ideas “Europe” and “Asia” were established and clarified the changes of connotations, whether positive or negative, given to these ideas, reconsidering thereby also the contemporary relationships between Europe and Asia on aesthetic level and exploring thus to reconstruct aesthetics from intercultural point of view.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
総計	8,000,000	2,400,000	10,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：文化接触（文化触変）、文化の重層性、文化のグローバル化、ワールドミュージック、間文化的美学、文化資源

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、小田部（研究代表者）が科学研究費によってそれまで7年にわたって行ってきた研究、すなわち「美学理論における方位の構想力」（基盤研究(C)(2)、2001-03年、課題番号13610055）および「文化的キアスムの美学」（基盤研究(B)、2004-07年、課題番号16320016）を踏まえ、そこにおいて新たに浮

上してきた課題に応えることを目標とした。

すでによく知られているように、サイドの「オリエンタリズム」の議論は主として近代ヨーロッパが被支配者としてのオリエントをいかに表象したのか、についての批判的研究であるが、研究代表者自身はこうした他者表象の問題がヨーロッパ内部にも認められることに留意し、とりわけ「南—北」ない

し「東一西」といった方位の表象が 18 世紀から 19 世紀にかけてのヨーロッパの美学理論において果たした役割を、近代的芸術観の成立過程に即して明らかにした(上述の科学研究費による研究「美学理論における方位の構想力」)。さらに、こうした他者表象は異文化接触を通して変容・変質するゆえに、研究代表者は「文化的キアスム」という術語のもとに美学における「文化触変」の研究を進めた(上述の科学研究費による研究「文化的キアスムの美学」)。

この研究を進めている際に、中国の高建平氏(中国社会科学院哲学研究所教授)より 2007 年 7 月の国際美学会議(トルコ・アンカラ)のシンポジウム「アジア美学の多様性」にパネリストとして招かれ、「日本の美学」について報告する機会を得た。研究代表者は、「日本的なもの」を実体化することなく、「文化的キアスム」の動きの内に「アジア」および「日本」の表象の変遷を跡づける試みを開始した。また、この報告を準備しているほぼ同時期に、2007 年 5 月に開催された 19 世紀学研究所第 1 回国際シンポジウム(新潟大学)において、「ロマン主義におけるヨーロッパの理念」と題する報告を行う機会を得た。この報告では、ヨーロッパにおいて近代的な意味における「ヨーロッパ」という観念が「アジア」という観念との対比において 18 世紀的末に成立したこと、そして 17-18 世紀にはなお広く認められた「礼節の土地アジア」という表象が否定されヨーロッパ中心主義的な世界観が形成されたこと、この点をとりわけロマン主義者の美学的言説をとおして分析した。上述の二つの報告は相互に関連するものであるが、これらを体系的・歴史的に結合することによって、今回の研究課題『「ヨーロッパ-アジア」の美学的理念史』の構想をえた。

## 2. 研究の目的

本研究は、「ヨーロッパ-アジア」関係を美学的に解きほぐし、これまで「ヨーロッパ的なもの」あるいは「アジア的なもの」と見なされてきたものが実は東西の理論的共働によって成り立っていることを〈間文化性〉という観点から解明すること目的とした。この目的を達成するために、主に次の四つの課題を立てた。

第一の課題は、ヨーロッパにおける「ヨーロッパ-アジア」概念の美学的コノテーションを、とりわけ古代から 19 世紀にいたるまでの古典的な美学理論(ないし美学的言説)のうちに明らかにすることである。

第二の課題は、17 世紀から 19 世紀中葉にかけて、東アジアの側が「ヨーロッパ-アジア」概念をいかに受容したのか、その過程を美学的に明らかにすることである。

第三の課題は、ヨーロッパとアジアの関係が相互的となった 20 世紀において、ヨーロッパとアジアが単に他者をいかに表象したか、のみならず、他者の目を介して自己をいかに表象したのか、といった相互的=再帰的視点を交えつつ、西洋および日本の美学的言説をとおして解明することである。

第四の課題は、主として 20 世紀における日本の(広義における)芸術運動の分析をとおして、今日〈日本的なもの〉とみなされているものが決して伝統的なそれと同一ではなく、むしろ近代西洋(あるいは〈西洋的なもの〉)と表象されたものとのさまざまな軌轢のもとに形成されたことを明らかにすることにある。

## 3. 研究の方法

本研究は美学を専門とする小田部(研究代表者)と芸術学を専門とする渡辺(研究分担者)が、それぞれの専門を生かしつつ密接な連携のもとに行った。そのために、小田部が主として狭義における美学理論の文献(学的研究に従事したのに対し、渡辺は広義の芸術学的・文化研究的・感性文化論的方法を組み込み、主題の多様性に対して応えようという心がけた。また、それぞれの研究については研究会をとおして定期的に成果を交換した。

## 4. 研究成果

先の第一から第三の課題に対して、小田部は、「ヨーロッパ-アジア」という理論的枠組みの成立を明らかにするために、文化のグローバリゼーションの過程を歴史的に三段階に分けそれぞれの特徴を明らかにすることによって、文化のグローバリゼーションの類型化・理論化を試みた。小田部によれば、東西が同一の世界像を共有しはじめるのは 17 世紀初めのことであるが、17-18 世紀にはなお東西がそれぞれの幻想を他者に投影し、他者を理想化する傾向が強いのにに対し(第 1 段階)、19 世紀になるとヨーロッパによるアジアの囲い込みの言説が確立する(美学の次元ではとりわけヘーゲル主義の芸術史観によって)(第 2 段階)。しかし、20 世紀になるとヨーロッパの言説を自己のものとしたアジアが、ヨーロッパの言説を利用しつつそれを改変することによって自己主張し、またヨーロッパもそうした言説を一部受け入れるようになり、ヨーロッパ-アジアの間に相互作用が成り立つようになる(第 3 段階)。この点について小田部はドイツ学術交流会東京事務所 30 周年記念シンポジウム(明治学院大学)[学会発表⑮]、第 6 回アジア芸術学会(台湾・台北)[学会発表⑯]、カッセル大学における公開講演会[学会発表⑰]などをとおして考察を深め、元国際美学連盟会長ハインツ・ペッツォルト 70 歳記念論文集への

寄稿論文（送付済み、未公開）において、それを最終的に理論化した。その際小田部は、文化的グローバル化の一環として「文化接触」を捉え、それを歴史的に三段階にまとめつつ、それぞれを特徴づける概念として、他文化の〈Idealisation〉・他文化の〈Acculturation〉・諸文化相互の〈Interculturation〉に着目した。

また、個別的な論点に即するならば、小田部は、1920年代から40年代にかけて活躍した京都学派の哲学者木村素衛の哲学・美学思想を、フィヒテとの対決、20世紀初頭ドイツの哲学的人間学、および伝統的な日本的思考との対決といった間文化的な視点から読み解き、その成果を著書『木村素衛——「表現愛」の美学』〔図書②〕にまとめた。さらに小田部はロータール・クナーツ、ノルベルト・カスパーとのドイツ語による共編著『文化的同一性と自己像——日本とドイツにおける啓蒙と近代』〔図書①〕においても木村素衛について論じたが、この書物は本科学研究費による研究を総括するものでもある。また、木村素衛と同時期に活躍したユダヤ系ドイツ人の哲学者カール・レーヴィットの日本滞在の意義を、同じく間文化的な観点から分析する作業にも携わり、20世紀における東西の Interculturation の具体相を明らかにするよう努めた〔雑誌論文①および②〕。

さらに、小田部は2010年の国際美学会議のシンポジウム「アジアの美学」において、日本における白楽天イメージの変遷を9世紀から18世紀まで追い、それを3段階——すなわち、白楽天を神格化した平安後期、白楽天をあえて対抗しようとする室町時代、白楽天を自らの世俗文化の内に同化する江戸時代——に歴史的に類型化することによって、日本という中華文明における周辺国が中国との対比において自己の文化を位置づけてきた様子を、間文化的な視点から分析した〔学会発表⑥〕。

渡辺は、明治期以来の「唱歌」およびその系譜の音楽（卒業式の歌、校歌、都道府県歌）や戦後のうたごえ運動の考察を著書『歌う国民——唱歌、校歌、うたごえ』〔図書④〕にまとめ、日本の西洋化＝近代化の過程において国民を作り上げるための「道具」であって、そもそも「芸術」ではなかったものが、日本人の「心の原風景」とみなされるにいたった過程を、さまざまな力学の織り成す場として解明した。これは、唱歌等の音楽を単に音楽的側面から考察するのではなく、むしろそれを取り巻く社会的・政治的環境とのかかわりの中で捉え返す試みであり、国民文化論に対して新たな一石を投じるものである。このようにして、渡辺は従来の西洋的な美学や芸術研究が芸術をいわば特権的に扱ってきた一面性を明らかにした。

さらに渡辺は日本の近代化における〈日本的なもの〉の表象の変遷を、映像資料（小樽に関する）、言説資料（日本橋に架ける高速道路に関する）に基づいて分析し〔雑誌論文③および④など〕、今日〈日本的なもの〉とみなされているものが決して伝統的なそれと同一ではなく、むしろ近代西洋（あるいは〈西洋的なもの〉と表象されたもの）とのさまざまな軋轢のもとに形成されたことを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計30件）

①小田部胤久、レーヴィットと日本——文化の複層性をめぐり一考察——、東洋意識——夢想と現実のあいだ（稲賀繁美編、ミネルヴァ書房）、査読なし（寄稿）、2012、75-100

②Otabe, Tanehisa, Karl Löwith und das japanische Denken, das in zwei Stockwerken lebt, JTLA, 2012、査読なし（寄稿）、印刷中

③渡辺裕、日本橋と高速道路——都市景観言説にみる美的判断の生成と変容の力学——、美学芸術学研究（東京大学）、2012、査読なし、印刷中

④渡辺裕、映像による都市イメージの生成と変容——映画《Love Letter》と小樽のまちづくり——、日常性の環境美学（西村清和編、勁草書房）、2012、査読なし（寄稿）、252-280頁

⑤Otabe, Tanehisa, “Wandering” as a Modern Idea - A Romantic Theme and its Variations, in: *Facing Mental Landscapes. Self-Reflections in the Mirror of Nature*, ed. by Manfred Milz, Hildesheim 2011、査読なし（寄稿）、307-322

⑥小田部胤久、坂部哲学に〈ふれる〉ために——美学からの試論——、坂部恵——精神史の水脈を汲む（水声社）、2011、査読なし（寄稿）、143-163頁

⑦Otabe, Tanehisa, Wann spricht die schweigende, wann schweigt die sprechende Natur? Schellings Kunstphilosophie und die romantische Kunstauffassung, in: Christian Danz und Jörg Jantzen (Hg.), *Gott, Natur, Kunst und Geschichte. Schelling zwischen Identitätsphilosophie und Freiheitsschrift*, Wien 2011、査読あり、103-114頁

⑧Otabe, Tanehisa, „Schöne Kunst muß als Natur anzusehen sein.“ Zu einer kleinen Ideengeschichte der Ästhetik, in: *Internationales Jahrbuch für Hermeneutik*, vol. 14, 2010, 査読あり、147-160

⑨ Otobe, Tanehisa, The Corporeity of Self-awakening and the Interculturality of Cultural Self-awakening: Motomori Kimura's Philosophy of Expression, in: Internaitonal Yearbook of Aesthetics, vol. 14, 2010, 査読あり、142-159

<http://iaaesthetics.org/publications/yearbooks#>

⑩ 小田部胤久、美学から見た日独文化交渉史——グローバル化の三段階、言語文化（明治学院大学言語文化研究所）、27巻、2010、査読なし（寄稿）、13-23

⑪ 渡辺裕、「ノイズ」言説・再考——ジンダとチンドンをめぐる表象の生成と変容、文学、11巻6号、2010、査読なし（寄稿）、70-87

⑫ 小田部胤久、「世界的潮流」のなかの日本の芸術——和辻哲郎『古寺巡礼』の文明論に寄せて、哲学と文明、2巻、2009年、査読なし（寄稿）、76-86

⑬ Otobe, Tanehisa, Making a Case for a Cultural Exchange of Aesthetics between Europe and Japan: The Three Stages of Cultural Globalization, in: The Journal of Asian Arts and Aesthetics, vol. 2, 2009, 査読あり、7-14

⑭ 渡辺裕、県歌《信濃の国》にみる「中央」と「地方」、アステイオン、71巻、2009、査読なし（寄稿）、132-135

⑮ 渡辺裕、東ドイツの美しい記憶？：「オスタルギー」のなかのベルリン、アステイオン、72巻、2009、査読なし（寄稿）、184-187

⑯ Watanabe, Hiroshi, Building the body and mind of Japanese "Nationals": Modern history of "Song (shōka)" in Japan, in: International Yearbook of Aesthetics, vol. 13, 2009, 査読あり、189-208

<http://iaaesthetics.org/publications/yearbooks#>

⑰ 渡辺裕、バナナの叩き売りの口上はいかにして「芸術」になったか、大航海、2009、査読なし（寄稿）、86-93

⑱ 渡辺裕、レクイエムは音楽？ 典礼？、アステイオン、70巻、2009年、査読なし（寄稿）、202-205

⑲ 小田部胤久、ロマン主義における「ヨーロッパ」の理念、シェリング年報、16巻、2008、査読なし（寄稿）、103-108

⑳ Otobe, Tanehisa, To What Extent Are Japanese Aesthetics Asian? On the Self-Images of Modern Japan, in: XVIIth International Congress of Aesthetics. Congress Book, vol. 1, 2008, 査読あり、103-108

21) Otobe, Tanehisa, Sōetsu Yanagis *Mingei*-Bewegung im Hinblick auf die Interkulturalität, vol. 33, 2008, 査読なし（寄稿）、45-61

〔学会発表〕（計22件）

① 渡辺裕、「鉄ちゃん」のサウンドスケープ——音楽の「環境化」再考、美学会東部会2011年度第5回例会、2012年3月3日、東京大学

② 小田部胤久、創造的資本としての近代美学、公開シンポジウム「アート of 社会的有用性」、2012年1月22日、京都精華大学情報館

③ 小田部胤久、美学の生成と無意識、シンポジウム「フロイトの時代」、2011年11月5日、東京大学

④ 小田部胤久、ライブニッツからの美学=感性論——微小表象論の射程——、美学会大62回全国大会シンポジウム、2011年10月17日、東北大学

⑤ Otobe Tanehisa, Der „Grund der „Seele“. Über Entstehung und Verlauf eines ästhetischen Diskurses im 18. Jahrhundert, Deutsche Gesellschaft für Philosophie, 2011年9月14日、ミュンヘン大学。

⑥ Otobe Tanehisa, Japanese Aesthetics seen from Intercultural Point of View, 17th International Congress of Aesthetics, 2010年8月10日、北京大学

⑦ Otobe Tanehisa, Karl Löwith and Japanese Thinking That Consists of Two Floors: A Contribution to Intercultural Aesthetics, 17th International Congress of Aesthetics, 2010年8月9日、北京大学

⑧ 小田部胤久、感性の理論——美学の立場から、感性科学フォーラム（基調講演）、2010年3月12日、九州大学大橋キャンパス

⑨ 小田部胤久、歴史家としてのヴィンケルマン——バロックと古典主義の交錯するところ——、19世紀学会主催シンポジウム「近代とミュージアムの成立」、2010年1月9日、新潟大学

⑩ 渡辺裕、日本近代のなかの宝塚歌劇、国際シンポジウム「戦間期(1918-1938)大阪音楽と近代」、2009年12月7日、国際日本文化研究センター

⑪ Otobe, Tanehisa, Ästhetik im Kulturaustausch zwischen Deutschland und Japan, 2009年1月28日、カッセル大学（ドイツ）、公開講演

⑫ Otobe, Tanehisa, Eine Ideengeschichte der „inneren Form“, 2009年1月22日ヒルデスハイム大学（ドイツ）（連続講義の1回）

⑬ Otobe, Tanehisa, „Schöne Kunst muss als Natur anzusehen sein.“ Zu einer kleinen Ideengeschichte der Ästhetik, 2009年1月14日、ハンブルク大学（ドイツ）（連続講義の1回）

⑭ Otobe, Tanehisa, The Three Stages of Cultural Globalization: Making a Case for a Cultural Exchange of Aesthetics between Europe and Japan, The 6th International

Conference of the Asian Society of Art in Taipei、2008年12月18日、台北（台湾）

⑮小田部胤久、美学から見た日独交渉史——グローバル化の三段階、シンポジウム「グローバル社会における日独文化」DAAD東京事務所開設30周年記念行事、2008年5月31日、明治学院大学

⑯小田部胤久、日本の美学確立期における「様式論」と「美的範疇論」——東洋的芸術をめぐる岡倉天心・和辻哲郎——、韓国美学芸術学学会、2008年4月19日、ソウル（韓国）西江大学校

〔図書〕（計5件）

①Lothar Knatz, Norbert Caspar, Tanehisa Otabe (ed.), *Kulturelle Identität und Selbstbild. Aufklärung und Moderne in Japan und Deutschland*, LIT Verlag (Berlin), 2011, 230

②小田部胤久、木村素衛——「表現愛」の美学、講談社、2010、204

③渡辺裕、考える耳再論——音楽は社会を映す、春秋社、2010、155

④渡辺裕、歌う国民——唱歌、校歌、うたごえ、中央公論新社、2010、298

⑤小田部胤久、西洋美学史、東京大学出版会、2009、267

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe>

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#watanabe>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小田部 胤久 (OTABE TANEHISA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：80211142

### (2) 研究分担者

渡辺 裕 (WATANABE HIROSHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：80167163

### (3) 連携研究者

なし